



アルカイド 第四十二秋号 目次

〔小説〕

はぐれ雲

変死現場

呼ビト

月と蛇

冷たい水

夜話

不確かな明日 あした

フルフルがなければ始まらない

小西 九嶺

二上 法幸

池戸 亮太

木村 誠子

荻野 央

船越 恒子

楠本 一功

高原ちよみ

4

16

34

51

57

78

94

117





鹿の昆虫博士

亀谷 美子

138

白杖の瞳

加川 清一

147

若いメル友

浦上 京子

150

水と少女

村井理恵子

165

「エッセイ」

父の水筒

奥畑 信子

183

骨川にて

多紀 祥子

184

アルカイド四十号・四十一号の反響 他

編集後記

同人名簿

194 193 191



## 『アルカイド四十号』

### 四十一号の反響 他

■季刊文科49号(同人雑誌季評 勝又浩) 「アルカイド」(大阪市)が40号、一〇年の歩みの「記念号」としている。小説だけでも一三編を揃えて四百ページを超える大冊である。小島千住「じごくのやかた」、村井理恵子「いちじく」など目に留まった作品がいくつかあるが、最も感動したのは佐伯晋「白い海へ」。元テレビディレクターが、二〇年前に撮ったドキュメンタリー番組「消え行く海女の集落」にまつわる余話、またその後日譚を語っている。取材過程での話もよいが、そのとき中心になってくれた海女がその後、自殺するように海で死んだ経緯ももう一つの物語として感動的である。評判になったこのドキュメンタリー番組は私も偶然見ていたが、いまま印象に残る場面がいくつもある好いものだった。しかしそのときは気づかなかったが、登場した海女たちのなかに済州島から出稼ぎに来ている一団もいたのだという。海女漁

は日本の海辺を伝わって各地にあるが、実は世界では済州島と日本だけに見られる珍しい習俗なのだという事実にも驚いた。そしてその海女たちだけに伝わる特殊な病気のことも、もう一つの哀切な物語となっている。二〇年前のドキュメント映画「消え行く……」が、ここで改めてもう一つのドキュメント小説「消えた……」となって蘇ったようなもの好いところだ。

#### ■三田文学秋季号

(新同人誌評 勝又浩・伊藤氏貴)

伊藤 次は鶴瀬順「螺旋」(「あるかいど」40)です。主人公がこどものときに母親が再婚。お互いに連れ子がいるんだけど、問題なく四人で暮らしていた。ところが、弟が死んで父親がアル中になり、手がつけられなくなつて、責任を感じている少年の話ですね。結局父親は、血のつながりのない自分に愛情を示してくれる。

勝又 主人公の息子が十歳になつたいま、自分が十歳だったころを回想しているんですね。螺旋というのは、人生をだんだん上上がっていくと下が見える、同じ方向と同じ場面が見える、ということかな。

現在は平和な家庭を築いて、息子と妻を連れて海水浴へ来ているんだけど、自分が十歳のときは祖母に預けられていた。そのかわりに、こどものころの彼は山と海で遊んで、自然のなかでいい生活をしていた、そういうところを丹念に書いているのが、この小説の良さです。

伊藤 海の場面はよく書けていましたね。ひとつだけもつたいたいと思つたのは、象徴となつている巻貝に固有名詞をつけてほしかった。主人公はこどものころから慣れているんですから。みんながその固有の貝を「巻貝」と言つていたのかもしれないませんが、最後に貝を食べる場面では、名前が欲しかったですね。

勝又 お葬式の場面はよかったです。集まつて造花をつくつたりして。あと、猫の子を捨てていくところも。母親は妊娠しているから自分では捨てに行けない。石を詰めて捨てなきゃいけないのに、この少年は捨て方を知らないな、と思ひながら読みました。案の定、母親に注意されている。捨てるときの「だれにも当たんなむかしのよかひとに当たれ」というおまじないは知りませんでした。あと、貝

を縫い針で刺して食べるというのは気になった。なんで楊枝じゃないのか。

伊藤 西宮ではそうなんでしょうか。危ないですよ。

勝又 でも逆に言えば、こんなことを言いたくなるくらい細部がよく書けている。こどもの生活が我々を触発したり喚起したりする、いいものなんですね。

■樹林夏号(小説同人誌評 佐々木国広)

小島千佳「じごくのやかた」(『あるかいど』第40号)

「私」が小学二年生の時、ヒナは二学期の初めに東京から転校してきた。和歌山の西部に石油コンビナートがあり、親の転勤によるものだった。彼女は級友と馴染めず、友達を作ろうとしない。その日、「死んだ人、見に行かない？」などと誘ってきた。ひっそりとして蜜柑畑に囲まれた所に墓地があり、「地獄の館」と呼ばれる焼き場がある。「私」はヒナが好きになれなかつたけれど、男子生徒を見返してやりたくなり、お供え用にと蜜柑を握いで焼き場へ入っていった。扉が開き、意地悪な鬼婆みたいな人が出てきて帰れと窘められたが、男の人にひき

とめられ、老婆と男は死んだ子供や母親について諍いを始めた。ヒナは逃げ失せ、「私」は男につかまって棺の方へ……。

題名からして読みたくなつた。焼き場という暗く異常な舞台での少女の心理が活写されていて、一種スリリングな気に

駆られた。主人公はそれ以来、蜜柑を口にしなくなつたとあるが、隠微な罪悪感のせいだろう。

■図書新聞・五月(同人誌評 志村有広)

現代小説では小島千任の「じごくのやかた」(あるかいど第四〇号)が面白い。〈じごくのやかた〉(地獄の館)とは、死体焼き場のこと。小学二年の私は東京から転校してきたヒナに誘われて〈じごくのやかた〉へ行つた。ヒナは幼い子が茶毘に付されることを知っていて、その死体を見ようと思つていた。死んだ幼子は小学校入学前に交通事故で命を落とし、その子の父親は私の黄色い帽子を取つて亡き子に被らせようとした。私は蜜柑を男に投げつけ、足を踏みつけ、帽子を奪い返すと辛うじて逃げ出すことができた。歳月が流れた。私は蜜柑を食べることができなくなつていた。少女時代の体験が

心に深く根を下ろす。私は死んだ子の父親に棺桶の中を見せつけられるのだが、少女の激しい恐怖心と場面の緊迫状況が巧みに表現されている。

■中日新聞・中部の文芸

(小説・評論 清水 信)

雑誌では、次のような記念誌に着目した。四百二十ページの大冊である「あるかいど」(大阪市)は40号記念号。(中略)「あるかいど」では佐伯晋の「白い海へ」と池戸亮太の「サルオリ」に注目。(後略)

■神戸新聞・同人誌(竹内和夫)

「あるかいど」41号(大阪市)高島寛「桜吹雪」は、18歳の高校生「僕」と、42歳の伯母「由紀さん」との風変わりな純愛物語というべきか。「僕」が学校近くの飛田で大人になつたことを琵琶湖畔に隠棲しているグラフィックデザイナーの由紀さんに報告することから、二人の手紙の交換が続く。「僕」が大人の男になつたことで、二人の関係はプラトニックな愛に純化していく。現在の伯母の性心理の表出が期待される琵琶湖での再会の場面が割愛されているのが残念であつた。

## 編集後記

●蓮畑の上に細い夕月が見える。思わず車からおりてそこに立つと、幽昏に染まり始めた枯蓮の沼からは風が立ち、夕月はとてもはかないもののように見えた。●遠い昔、私は窓の向こうから聴こえてくる歌に酔った。「なにとなくきみに待たるるこちしていでし花野の夕月夜かな」与謝野晶子の歌集であった。その日から私は、花野にのぼる夕月ばかりを探して歩きはじめたような気がする。●あれから四十五年の歳月が経ち、友人たちは収穫の謔かな季節を迎えつつあるのに、私はますますさまざまな格好で立っている。よい感性を掴みたい——この飢餓感は尽きることはないのだろうか。(祥子)

●この二年間、日本語を母語とした異邦人作家の受賞が話題になった。第百三十九回芥川賞を受賞した楊逸

(ヤンイー)は中国人、日本語歴は二十年。第一〇八回文學界新人賞のシリル・ネザマフィはイラン人。母語はペルシャ語で日本語歴は十年。受賞作は初めから日本語で考え執筆している。日本語習得の早さはもちろんだが、彼女らの到達した文学的な高さに驚く。シリル・ネザマフィは今年も芥川賞候補に名が上った。二度目である。●自分の母語でない言語で小説を書く、その異質で刺激的な状況の中で、どのような可能性が切り拓かれるのだろうか。多和田葉子(第一〇八回芥川賞受賞)が「エクソフォニー 母語の外へ出る旅」の中でこの疑問にこたえている(エクソフォニーはドイツ語で、母語の外に出た状態)。ドイツ語の詩人・作家として、また日本語の作家として旺盛な創作活動を展開している。彼女がとりくむ「言語の越境」という自らの文学テーマは普遍性があり、文学の本質についている。「わ

たしはたくさんの言語を学習するということ自体にそれほど興味が無い。言葉そのものよりも二ヶ国語の間の狭間そのものが大切であるような気がする。わたしはA語でもB語でも書く作家になりたいのではなく、むしろA語とB語の間に、詩的な峡谷を見つけて落ちて行きたいのかもしれない」●パリの書店に、村上春樹、辻仁成、小川洋子などの作品がズラリと並んでいて驚いたことがある。いずれも翻訳本だが、こうした例外をのぞけば、「現代日本文学のほとんどは、同時代世界文学たりえない」と嘆かれる状況が続いている。この日本文学に異邦人が入ってきて、「エクソフォニー」という不思議な波紋を拡げ、「日本の文学」とは何かという問題をわれわれに提起している。二言語のハイブリッド性、「言語と文学」という問題―秋の夜長に、もう少し考え続けたいテーマである。

(晋)